

LiPPSと過ごす意味のない日常

魚編太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

LiPPSのメンバーとの下らない日常生活を書いたものです。

目次

第1話	こうして城ヶ崎美嘉のコラムは伝説になった	1
-----	----------------------	---

第1話 こうして城ヶ崎美嘉のコラムは伝説になった

「頼む周子！ 俺の童貞を奪ってくれ！」

俺は土下座した。

見事なフォームから繰り出されるそれは、分かる人が見れば一流だと迷わず断言するほど完璧なモノだと自負している。

「……」

それなのに、周子の反応は冷たい。というかない。俺の渾身の土下座を無視してスマホをいじってる。知ってるか、人間無視されるのが一番こたえるんだぞ。

「ちよつとくらい反応してくれよ」

「死んでくれへんかなあ」

やっと返事が返ってきたと思ったら、辛辣すぎてビククリした。

土下座してまで告白したのに、死ねって、そんなことある？ 正確には告白じゃなくて、脱童貞させてって言ったけど、それはまあちよつとしたニュアンスの違いだ。むしろ素直な分、乙女心をグツと掴むまである。

今回はフラれてしまったが、俺は諦めない。

笑顔で更に話しかける。

「ははは、ツンデレめ」

「どっちかっていうとシューコちゃん、クーデレな見た目じゃない？」

「たしかに。じゃあクールにデレてくれ」

「液体化窒素かドライアイスあったかなあ」

「物理的！ それにデレ要素はどこ!？」

「皮膚がデレっデレになるやろ？」

「うん。そのデレ要素はいらさないな」

俺に冷たい（物理）な返しをする少女、塩見周子。

俺が管理人をしている寮に住む内の一人だ。

「実家に寄生してないで何かしろ」と両親に家を追い出され上京し

たものの、特にやりたいことも見つからず、バイトで小銭を稼いでその日暮らしをしているフリーターである。

ちなみに超のつく美少女（ここ重要）。

髪をブリーチして、ピアスなんかもつけている、これぞグレた箱入り娘！　みたいな見た目だ。

普段はこうして大広間で特に何をするでもなく、くつろいでいる。

「今月家賃払わなくていいから、な？」

「大家さんさあ、歳下相手にそんな風で恥ずかしくないの？」

「ふっ。恥ずかしさなんてものは、とうの昔に捨ててきてしまったさ」

「えっ、なんでそこカッコつけたん？」

「今では全裸で町内会一周するくらいわけないぜ！」

「それはもう恥ずかしさとか関係ないんとちゃう」

「こないだやったら、寒すぎて風邪ひきかけたけど」

「本当にやったんかい」

会話をしながらも、周子は少しもスマホから目を離さない。

そんな姿も様になっているけど、やっぱり顔を見ながら話したい。

よし、ここはひとつ……。

「周子」

「んー？」

「今日の夕ご飯はお前の好きな物を作ってやろう」

「え、マジ？」

バツとこつちを見る周子。

はい、物で釣りました。

それ以外に興味を惹ける物なんて、俺にはないから……。

か、悲しくなんかないぞ！　歳下の女の子に目を合わせて話してもらうためだけに物で釣ったからって、悲しくなんてないんだからねっ！

「えっと、周子の好きな物はダーツと献血と八ツ橋だったな。献血はその三つでいいか？」

「そうそう。献血がドリンク、ダーツがメイン、デザートは八ツ橋でお願いね」

「後はオードブル、スープ、魚料理、肉料理、サラダの五つか。お前はシューコ？」

「いやいや、シューコちゃんグルメ細胞入ってないから」

「で、実際のとこ何食べたい？」

「お鍋かなあ。豆乳ベースのやつ」

「豆乳鍋か。出汁と白菜がないな。誰かに買って帰ってもらうか」

「じゃあラインで流しとくね」

「食べ物のことになると素早いな」

「いや、大家さんの相手してるときだけ鈍いんだよ」

「ははは、ツンデレめ」

「液体窒素かドライアイスあったかなあ」

「飛ばしすぎ、飛ばしすぎ。さつき一回やっただりとはいえとはいえ、会話だしぶ飛ばしてるから。急に俺を殺そうとしてるから」

喋りながらコタツを抜けて、キッチンへと向かった。

今の時刻は午後六時、そろそろみんなが帰ってくる時間だ。今日は寒いし、みんな早く夕ご飯を食べたいだろう。出汁と白菜はないけど、下準備くらいはやっておこう。

「……」

ふと背中に視線を感じて振り返ると、周子が変な物でも見るような顔でこつちを見てた。

「どうした？」

「んー。大家さんてさあ、変な所でマメだよな」

「まあな。昔雑誌で『マメな男はモテる』という記事を見て以来、俺はマメな男よ」

「発言ももうちよい気を遣えたらねえ」

「いやいや、俺発言にめっちゃ気をつけてるから。巷では『エチケツトの鬼』や『紀元前以降で最高のフェミニスト』と呼ぶ声もあるというほどだ」

「お腹すいたーん」

「会話の流れ無視か、お前は。本能に忠実か」

周子はスマホを投げ出して、コタツに顔を突っ伏した。

こうなった周子はもうダメだ、テコでも動かない。どうでもいいけど、テコでも動かないって、ドラマとか本だとよく見かける表現だけどあんまり日常で使わないな。

「ただいま帰ったわ」

「たっだいまー！ー！」

対照的な挨拶と共に、二人の女の子が部屋に入ってきた。

無駄に大人びている方が速水奏、ギャルな見た目の方が城ヶ崎美嘉。

二人とも同じ十七歳で、この近くの高校に通ってる。スーパーで買い物をしてきてくれたみたいで、二人で買い物袋を持っていた。

美嘉は埼玉県出身で、中学生の時までは向こうで暮らしていたのだが、中学校卒業と同時にモデルになったので上京。色々縁あってここで暮らしてる。

モデルってだけあってスタイルは抜群だし、顔ももちろん可愛い。当然モテるのだが、それを鼻に掛けないし、誰にでも優しくとつきやすい。気の良いギャルを体現したような女の子だ。

奏は出身こそこと同じ東京なのだが、なんというか、複雑な状況で元いた高校を転校した。その時家から通うのがちよつと不便になったのと、両親と仲がこじれたりなんだから、ここに越してきた。

十七歳とは思えないくらい大人びてて、ぶっちゃけ色香がすごい。見た目もそうなのだが、話し方とか雰囲気もう女子高生のそれじゃない。周子も見習え。

「おかえり、俺の奏、寒かっただろ。今コーヒーを淹れるから、コタツに入って待つてくれよ」

「ありがとう。貴方のではないけれど、お言葉に甘えさせてもらうわ。お砂糖とミルクは甘さで蕩けちゃうくらいたっぷりでお願いな」

「はいよ。そんで美嘉、出口はあっちだ」

「うん、じゃあね★」

美嘉は買い物袋を置き、今入ってきたふすまから出ていった。

ここはでかい家を寮に改装した寮だ。今俺たちがいる大広間があるのが一階、そして二階にはそれぞれの個室がある。音からすると、

美嘉はちゃんと自分の部屋に戻ったようだ。

その後、数秒経ったところで——ダダダダダダツ！ と駆け下りてくる音が響いた。次の瞬間ふすまを勢いよく開けながら、息を切らした美嘉が飛び込んでくる。

「はあ、はあ……帰らないよ！」

「長いノリツツコミだったな」

「まあ美嘉ちゃんはカリスマだからね。ノリツツコミも長いんだよ」

「カリスマ関係ない！」

全力のツツコミを入れながら、美嘉がコタツに入った。

美嘉いじりの流れは終わったな、と周子が再びだらけモードに入り、俺も奏のコーヒーと美嘉のココアの準備に取り掛かる。

しかし意外なことに、奏が再び美嘉いじりの流れに戻した。

「それで美嘉、なんで戻ってきたのかしら？」

「えっ、なんでって、お夕飯を食べるためだけ……」

「……ここは俺もノッておくことにしよう。」

「いやいや、一人で食べればいいだろ」

「えっ、嘘でしょ？ アタシみんなの分の食材買って帰って来たんだよ？ しかもその間、奏とずっと「お鍋楽しみなね★」って会話してたんだよ？ それなのに一人帰らされるなんてこと、あっていいの……っ？」

「みんなで鍋を突きたいのか？」

「突きたい！」

「ソフっ。ど、どのくらいシユーコちゃん達と一緒に食べたい？」

「どのく……みんなと食べるためなら、アタシ、モデルだって辞める覚悟だよ！」

「ふふふ。莉嘉ちゃんが今、急病で病院に運ばれたって知らせが入ったら、どうするっ？」

「泣きながら病院行く。見なさい莉嘉！ この涙は、お鍋のために流した涙なの！ アンタはお鍋の分まで生きるの！……っ」

「謎の宣言を受ける莉嘉ちゃん」

「いやいや、案外素直に受け止めるかもしれないぞ。「分かったお姉

「ちゃん、アタシお鍋の分も生きる！」って」

「それを見て満足そうに立ち去る美嘉」

「そっか。莉嘉も成長してるんだね……」

「ちやらちやちやちやちや」

「Good End!」

最後にそう締めくくった所で、ちょうどお湯が沸いた。

美嘉専用のマグカップと、奏専用のマグカップに飲み物を入れてコタツに持って行く。

「ほら、コーヒーとココア出来たぞ」

「ありがとう。美味しそうね」

「ありがとう★」

「どういたしましたして、奏。美嘉は対価として後でおっぱいな」

「アタシの身体安くない!?!」

「だがもうお前はココアを受け取ってしまっている！ グヒヒ、これで美嘉のおっぱいは俺の物よー」

「うわあ、ゲツスイ顔してるわー」

美嘉が顔を真っ赤にしながら、こつちを睨んで来た。

他のメンバーは俺がセクハラしても無視か流すだけだけど、美嘉だけはいつも良いリアクションをしてくれる。これだから美嘉にセクハラするのはやめられない。すげえよミカは。

「こら、大家さん。あんまり美嘉ちゃんをいじめちゃダメだぞ」

そう言いながら入って来たのは、俺を除けば最年長の宮本フレデリカだ。

フランス人と日本人の HALF で、色々と目立つ見た目をしている、近くのアダルト系専門学校に通ってるパリジェンヌだ。

最年長女子らしくしつかりしたところもあるけど、意味分かんない会話をする筆頭その一でもある。初めてあった時、若い女の子の会話についていくのは大変だなって思ったけど、フレデリカが特別大変なだけだった。

「フレちゃんお帰り〜」

「ボンジュール、シューコちゃん」

「それただいまの挨拶なん?」

「そうだよ。たぶん!」

「あつ、ケーキ買って来てくれたん。どこの?」

「んふふー、シャンゼリゼ通りのレ・シューで買ったんだ」

「シャンゼリゼ通り庶民的やね〜」

フレデリカからケーキの箱を受け取って冷蔵庫に入れる。その途中で周子が鼻をヒクヒクさせてた。いや、そこから嗅いでも分からないだろ。

「フレちゃん、志希は一緒じゃないの?」

「昨日までは一緒だった!」

「今日は一緒じゃないのね。……はあ、あの子どもいったのかしら。お腹が空いたのだけれど……」

「あいつ匂いフェチだし、フレデリカを換気扇の下にでも置いとけばくるんじゃない?」

「わーお! フレちゃん置くだけだね」

「美嘉はちよつとどいててくれな」

「なんでよ!? アタシも良い匂いするから!」

「こんぶ出汁的なー?」

「うまみっ! 確かに良い匂いかもしれないけど、そういうことじゃなくて!」

「お線香みたいな匂いかもしれないぞ」

「別物が寄ってきそうだね」

「わーお、美嘉ちゃんってばお盆ー。おぼん de ごはんだね!」

「音だけっ! もう普通に意味わかんねえから」

「お腹空いたーん」

「だから、自由か。いやフレデリカがご飯屋さんの名前出したけど」

そうこうしている間に、奏がケータイを取り出して電話をかけ始めた。そして、同時に、後ろの押し入れから音楽が。

「なんで仰げば尊し?」

「知らん。またあいつの謎ブームだろ」

こくないだは軍歌にハマってた。爆音で聴きながら爪のにおいを嗅

いでトリップしてた。危ないやつだ。普通に『ダメ。ゼツタイ』やってるやつより怖い。

「にやはははー、バレたちゃったか。実は最初から押し入れに居たのでしたー!」

押し入れから勢いよく飛び出してきた少女、一ノ瀬志希。ここに住む最後の一人だ。天真爛漫にちよつと猫を足したモノに服を着させたような奴で、興味が三秒しか持たない。というか『ギフテッド』という天才で、三秒もあれば大体のことは理解する。

まあそんなことはどうでもよくて、大事なのは外見だ。ちよつとロールした髪の毛にクリンとした瞳、黙ってれば美少女という言葉があるが、こいつは黙ってなくても美少女なのだ。性格が壊滅的でも全部許せる。ちなみに、意味わかんない会話する奴その二だ。

「まったくもう。そんなところにいたのね。もつと早く出てくればいいのに。……いつからいたの?」

「さあねー。観測したのは今、だからそれより前つてことは確か。てことで、今日の志希ちゃんはシュレインガーの志希ちゃん!」

「シュガーバターのシキちゃん?　なんか美味しそう!」

「うん。あたしクレープになっちゃったねー」

「おーい。意味わかんない会話すんな」

「なんで?」

「混ざれなくて寂しいから」

「にやはははー。それは失敬。飼い主を寂しがらせるようじゃ、ペツト失格かにゃ?」

「おいやめろ。その、自分をペツト呼ばわりするやつ。あらぬ誤解を生むだろ」

「でも間違つてないでしょ?　露頭に迷ったあたし、拾ったキミ。ほら、ハートフルなストーリーの予感!　全米が泣いた!　つてことで、これからも仲良くやっていこー!」

「はいはい。奏が嫉妬しない程度にな」

「いきなり私に振るのやめなさい。それに、私は嫉妬しないわ。させる側なの」

なにその返し、かつこ良すぎる。

またひとつ奏の美しさを知れたことを神に感謝していると、ちよいちよいと袖を引かれた。見ると、そこには不満げな顔をした周子。

「なんか忘れてへん？」

「えっ？ ああ、今日も可愛いな、好きだぞ」

「いやなにその最悪のタイミングな告白。そうやなくて、お腹空いた」

「ああ、わるいわるい。今作るわ。ちよつと待ってる。美嘉も、悪いんだけど、四年くらい待っててくれな」

「悪すぎるよ！ スペシャルテでも作るの!? そんなに待てないよ！」

「ふう。短気だなあ」

「お夕食を四年も待てる人って、気が長いっていうか、ボケてると思うけど……」

そういいながらも、美嘉は食器を並べ出した。いいやつだ。次いでフレデリカも、寝起きの小鳥が巣から落ちこちた時みたいなの、なんとも言えない鼻歌を歌いながら手伝い始めた。

「……………別に、二人もくつろいでいいんだぞ？」

「ふふーん。フレちゃんはくつろいでるよ」

「そういうこと★」

流石カリスマモデル、と思うくらいに、とびっきりのウイנקをしながら美嘉が言った。俺は嬉しくなって、思わず素直な気持ちを言うてしまう。

「お前ら……………ちよつとなに言ってるかよくわかんねえわ」

「なんでよっ！ こうして手伝いすることが逆に安らぎみたいなの、そうゆう感じじゃん」

「ああ、なるほどね……………はいはい。ほーん、ふーん……………」

「いやいやいや。全然理解できてないじゃん！ 莉嘉にスマホの使い方教えてもらってる時のお父さんとおんなじ顔してるよ！」

「あー、その例えわかるわー」

「お父さんのところだけ共感された!？」

いつもの下らない話をしていると、ふと美嘉が真面目な声を出し

た。

「あ、そうだ。ひとつ頼まれて欲しいことがあるんだよね」

「しようがないな。それじゃあ明日、ご両親に挨拶に行くか」

「なんかすごい勘違いされてる!? ってそうじゃなくて、アタシの仕事を手伝って欲しいの」

「えっ、モデルデビューすんの、俺」

「あははっ、それも面白いかも★ でも残念、今回はエッセイのお誘いなのでしたー」

「エスエムのお誘い……?」

「え、エスっ——！ ば、ばばば、バーカバーカ！ 大家さんのバカ！」

顔を真っ赤にした美嘉は、口を腕を組んでそっぽを向いてしまった。

流星に悪いことをしたかな、と思っていると、後ろからフレデリカに小突かれた。『いい加減にしなさい！』ということらしい。話さなくても、なんとなく雰囲気わかる。

「あー、なんだ。ふざけすぎたよ。すまん」

「……ん。いいよ。実はそんなに怒ってないから。それより、反省してるんだったら、ちゃんとアタシの話を聞くこと！ わかった人！」

「はいー！」

「うん、よろしいー！」

元気に手をあげる俺と、それを褒める美嘉。怒り方が自然と反省を促す感じがする。上手く言えないけど、なんかこう、お姉ちゃんできりスマなんだなって思ったわ、今。

「それで、実はさ、コラムを頼まれたんだよね」

「実はって……そんなの、いつも書いてるだろ」

「いつもとはちよつと違うんだよね。普段のはアタシの生き方とか、モデルとしての心構えなんかを書いてるんだけど、今回のテーマはアタシの日常生活なの」

「カリスマギャルのプライベート、的なことか?」

「そう、それ！」

そう言えば、最近はそういうのが流行ってるってどっかで聞いた気

がする。舞台の上も見たいけど、その裏側を見たい人が多いとかなんとか。ちよつと違うかもしれないが、モーニングルーティーン動画とかに近い感じか。

「それでね。アタシが寮に住んでること話したら、そこでの生活風景を書いて欲しいって頼まれちゃってさ」

「ええ……。大丈夫なのか、それ。ここでの会話出したら、荒れるぞ。アメリカが」

「どんな会話してるのアタシたち!? 普通に雑談してるだけでしょ！」

「まあそうだけど」

いや、マジで雑談しかしてないぞ。

美嘉のファンが求めているオシヤレさとかそういうのは、一切ないけど大丈夫なのか。

「そういうのは別で出してるからいいの。住み分けだよ、住み分け」

「日本とブラジルくらい居住地ちがうだろ。環境の違いで読者の人が体調不良おこすまである」

「それが受けるの。というわけで、許可ちょうだい。具体的な名前は伏せるから、ね」

「まあ、いいけど」

「やった★ じゃあ、執筆よろしくね」

「おう。……。いやいやいや、待て待て待て。そんな★が弾けるウインクしながらカリスマ去りしてもダメだぞ。今、なんて言った？」

「ファンのみんなが、なにより大事だよっ！」

「そんなセリフ言ってないだろ！ そうじゃなくて、最後になにかとてつもないこと言ってなかったか？」

「探せ！ この世の全てをそこに置いてきた……」

「それは某海賊王の最期の言葉だろ！ 確かにとてつもなく大事だけどな！ って違えよ！ 俺が執筆するとかどうとか、言ってただろ！」

美嘉は汗をだらだらかきながら、目をあつちこつち泳がせていた。

「きや、客観的な視点が欲しいんだってさ。それで、その……テへ」
「可愛く言ってもダメだぞ」

「だから、試しに大家さんに書いてもらおうおっかって言ったら、通っちゃったんだってば！ 悪い!?!」

「なにその最悪の開き直り！ 悪いわ!」

「……いや本当に、ゴメン」

打って変わって、申し訳なさそうに謝る美嘉。さつきはああ言ったけど、正直、可愛さだけで許しちやいそうになる。

どうしたものかと考えているうちに、夕食の準備が整った。みんなで『いただきます』をしてから食べ始める。

「でもさあ」

と話し始めたのは周子。

「大家さん暇じゃん。書いてあげればー?」

「お前に言われたくないわ。それに俺は、日々みんなが快適に暮らせるように努力してるんだ」

「例えば?」

「この世に光をもたらした」

「天地創造やないか。週末以外にも休み作って」

「お前は毎日が休みだろ」

「まあねー。……真面目な話、ちよつと気になるなあ。大家さんがシューコちゃん達の日常を書くの」

「ほら、周子もこう言ってる!」

「でもなあ……」

気は、乗らない。

そもそもそれ、俺が書いていいのか? 美嘉を見たい人達が、俺たちの日常を見て面白いと思うのだろうか。ちよつとしたコラムとは言え、炎上しないだろうかとか、色々な考えが浮かんでしまう。

よし。美嘉には悪いが、やっぱりこの話は断ろう。

「ねえ、大家さん、私も見たいわ」

「直ぐに執筆に取り掛からせていただきます」

そうと決まれば、飯なんか食ってる場合じゃない。なんとたって俺の

奏の頼みだ。

「とりあえず、十万字くらい書くか！」

「コラムどころかエッセイ本が出せちゃうよ！ そんなに書かなくていいからー！」

「じゃあ九万九千九百九十九文字くらいにしとくか」

「一文字しか減ってないっ！ そんなに書くことないでしょ」

「九万九千九百九十七文字は奏への愛を描くから大丈夫だ」

「それはもうラブレターやない？ 他の二文字はなに？」

「最後に『美嘉』って書いておく」

「せめてフルネームで書いてよ！」

「ちよつとスペース空いてないな」

「アタシのコラムなのに!？」

しょうがない。

奏が美人すぎるのが悪いのだ。

「でもさあ、俺が居ていいのか？ なんか、美嘉の周りに男がいるってスキヤンダルになりそうじゃないか？」

「んー、どうだろ。アタシの事務所は恋愛自由だけど……」

「美嘉、俺のことをそんな風に思ってたのか」

「違うよ！ 恋愛自由だからどう思われてもいいってだけ！ あ、ア

タシが大家さんをどうとか、あ、ありゆえないかりや！」

「うーん、天才のシキちゃんできえなんて言ってるか解読不能ー！」

「うりゆさい！」

「にやはははー」

「こほん、と美嘉は咳払いした。

「とにかく、一応、編集さんに見せるから大丈夫だと思う」

「載せちゃダメな要素は弾くってことか」

「うん」

「えっ、じゃあ、大家さんの登場シーン全部カットもありえるん？」

「俺はどんだけ危険人物なんだよ。なくなるぞ。ページ、なくなるぞ。

俺ずつとここにいるんだからな」

「それじゃあ、キミ、犬とかになるかもよ。美嘉ちゃんのイメージのた

めに。大家から看板犬にジヨブチエーンジ」

「わーお！ ううん、わーん！ だね」

「すげえ意味わかんねえことになるけどな。犬が吠えてるのに、何事もなく進んでく会話になるぞ。仮に今日をコラムにしたら冒頭とか、犬に液体化窒素かけようとしてるシーンになるからな」

「なんか、他の団体から怒られそう」

「じゃあじゃあ、あたしは猫になるー！」

『『じゃあ』の意味がわかんねえよ。それに犬と猫と人間で囲う鍋ってなんだよ。すげえファンタジーな世界観だな』

「なるほど珍百景とかでありそうね」

「それじゃあフレちゃんはマカロン！」

「うーん、シユーコちゃんは狐かな」

我が寮から続々と人が消えていった。しかも一人……一個？ は生き物ですらない。

「人の方が少なくなっちゃった!? ど、どうしよう奏！」

「あら、いいじゃない。犬と猫とマカロンと狐に囲まれながら、二人で楽しくやっついていきましょう」

「そんな四面楚歌で楽しくやるのは無理だよ！」

「カリスマギャル、城ヶ崎美嘉の日常は、マカロンに起こされるところから始まる」

「美嘉ちゃん起きてー！」

「マカロンが起こしにやってきた!？」

「わお！ メルヘン！ はっ、もしかして美嘉ちゃんの髪は地毛だったとか？」

「違うよ！ 毎月染めてるよ！ ギャルだよ、メルヘンから遠いよ！」

「じゃあ、メルヘン要素追加のために、キティちゃんのサンダルを履こう」

「それはダメ！ なんか、いろいろダメじゃん、それはさー！」

……ギャルではある。ただ、カリスマギャルではないかもしれないな。

「ところで、大家さん」

「どうした俺の奏」

「貴方のではないけれど、鍋、美味しいわ」

「今!? いやまあ、ありがとう。……今ア!?」

「何で二回、それも時間差で……そんなに驚くことかしら。女の子からの感謝は、素直に受け取っておくことよ」

「ああ。そうするよ。まあ、我ながらよく出来てるとは思った。でも鍋はちよつとやばかったな」

「どうして?」

「酒が飲みたくなる」

「あら、飲めばいいじゃない」

「いいのか?」

「ここに居るのは、最年長のフレデリカも含めて全員未成年だ。だから普段は、飲まないようにしてる。」

「あつ! じゃあじゃあ、あたしがお酌してあげる!」

「お、マジか。じゃあまたの機会にな」

「うん。自然な流れで断られたねー。でもダメ。シキちゃんはやると決めたらやる女の子なのでした」

「そういつて白衣のポッケからお猪口を取り出した志希。いやどういふことだよ。」

「困惑する俺達をよそに、志希は上機嫌に冷蔵庫へと走っていった。そして「失礼します」と、普段よりちよつとだけ色っぽい声でお猪口へと注ぐ。……お醤油を。なみなみと。」

「いや、飲めと?」

「ささっ、グイツと」

「無理だよ! 塩分過多で死ぬわ!」

「そう思いますが、減塩をご用意させていただきました」

「他に気回すところがあったよなあ!」

「お客様ったら、お元気がよろしいことで」

「さつきからその『出来る若女将キャラ』もなんなんだよ。ちよつとイラツとするからやめろ」

「ご冗談を……さ、お口の方から迎えてあげてください」

「あ、それじゃあ失礼して——とはならねえから！」

「うーん、ノリ悪くなった？」

「なってねえよ。お前の頭が悪くなったんだよ」

「勿体ないお言葉でございます」

「これで勿体ないの!? どんだけ自己評価低いんだよ」

一通りの流れが終わると、志希は飽きたらしい。全部投げ出して、食事を再開した。

「こらっ、志希ちゃん。お醤油を出したんだから、ちゃんと使わないとダメだぞ」

「えー。シキちゃん、気分じゃなーい」

「ちゃんとしないと、大豆の神様からジェリービーンズアタックされちゃうよ」

「うーん、痛くなさそう……」

ふしようぶしようながらも、志希はフレデリカの言うことを聞き始めた。流石フレデリカだ。頼りになる女だ。パリジエンヌだ。

フレデリカがいないと、こいつ、平気で食べ物で遊んだりするからな。こないだなんて、トマトの中に注射器で牛の血入れて『即席殺人現場!』と言って投げてきやがった。イカれてる女だ。ギフトेटだ。

「話を戻すけど、それじゃあ、今日の会話を文にして送ればいいのか？」

「うん★ よろしくねっ!」

「どうなっても知らんぞ、マジで」

世間での美嘉のイメージと、ここでの扱いは随分と差がある。それにここの住人——俺と奏でを除く——はアホばかりだ。世間に出しているものだろうか。

まあ編集さんがどうにかするだろ。

どうにかする、よな?」